





世尊寺法書白卷第六

行能卿書

上毛町田清興審定

光源氏物語系圖

太上天皇

桐壺乃善より御くらりてひきくた

いしと鏡ふあふひの善にくらりけ者宮小

いけりておのけけしけせぬふさうこのをいを

十一月一日の院さうけりてあふさうとつる御内

いし

朱雀院

母の殿の太皇太后

桐壺れを小者宮にをらしけあふひの善にくら

けけつさみとけくしのをさうらわぬ東

宮にいはいわらふのをにゆく〜おう〜て
い〜やまの寺すふ〜したるを産坊坊主

今と 女兼香殿女侍 左方乃女

あう〜のをふ二歳とみあふりかたはしく
このあよ東まにやうら梅のあ乃をいゆえ
あふふれをり位につせ給

春宮 女明中宮 左條殿女

わかれのをいむ〜終始をあ〜るにい〜
給とや〜き小坊小をら給

二品宮 丹國事女

か〜ら中なるをい〜ふ舞れお〜の中
乃君とえ〜て六條殿のをむ〜ん 此や
み〜ら〜〜あ〜

白兵部御宮

そね——いぢやとふぢ——あふげきり物
あ——人ぢや

中務宮

やと木にた文涉心乃母とらむぢや
あ——人ぢや

一品宮 母東宮の女

いぢやもこ——いぢや——あふ
あふは乃あ乃のふこ——あふぢや
いぢやとあふぢやあふぢや
いぢや——あふ

女二宮 母藤室乃女

あふのあふた——あふぢや
いぢやあふのあふぢやあふぢや
あふ——あふぢやあふぢや

いふくおのふかきあめくらとよみよの
るりーいばきつけふちなましくい
くもみあはれめうきよ

落葉宮 女一宗師鳥行

わさ乃をいかに本のちよの替れ
方にちりお替をくくつしよあれちお替
ちりよあしひ如くは替は替のさい一宗
乃をいそあいくめはふお替二つ又乃は
本もひみは替あちちるふかきよ
いふ人

二品内親王 女一宗師鳥行のま

わさ乃をいかに本のちよの替れ
いほはちりお替をくくつしよあれちお替
はたのころあつちよのちよの替れ

志のいふあふあてういづるおねはせぬか
かへはふのあこにあこにちりぬらぬか
とわはういづるか——くちあ——女三のふり

六條院

女三のふり

きまつふのあこにむれはふ三歳よをぬにぬく
れらよぬぬこのむにたがむせちやぬぬぬ
欠つる年之状 原案のりしりぬぬ そのよなふらぬ

亭にううてぬふはふまのぬに中ねぬぬた

子とて入らの質のあよ正に位 賀のすいぬぬ

あに宰相 中ねぬぬ あつぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

事とすあぬてはふぬのぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

のうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

このあぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ふいり〜容法をうくうの年十二月より
章として補すとさう〜冬に秋除目乃つて
に尉をとぬてりんゆかありおが〜あに木
荘院の幼章の侍従よりあをぬかつての
若に宰相 中おののぬらう〜衆のそり程
中細をわゝかのをにたをるおにゆををの
をい給大御といりておたわよ務をわいり
中おのそにおたわ 若の竹叶にたをるゆん
人の大ねいも

右衛門督

ふいり〜冬つるの祝もも人との言うらして
志所〜中家乃にけりい〜ましてたを
〜人なわ

申納言

あまのここの日右衛門さまは出仕し人
なすり

源平相中將 母と除と

源平のつれづれいさ竹河のをいしと
中おもを命をいしに平相 中おもの
いよりの女御ひそくぬの思ひは女よといひく
とく人

侍従相

いしひつにあらよきつるのまはひは
てあしとくをいしに人なすり

頭中將

いしひつにあらよきつるのまはひは
あらしとくをいしに人なすり

右大辨

権中納言

いよめは是迄えかひ出はせし人

左中納言

此所乃骨みちもたれははるるふい

しこのりふりあはるる人

なり

四位少将

一わのまははるの河原増林ははるるま

しやたきし人なりしはるる人

人

藏人兵衛佐

さねももはるるまはるるはるる

人

侍従

竹河乃正月母らおぼろけおぼろけに
かたのちりいふくさくさくさくさく人

春宮女御

かたふ中ねのそいさまさくさくさく

中老

二子の小方いさなりけりよき母のこゝろ

しきりかしていささ給

之志 ぬきさくさくさくさくさくさく

六老 ぬきさくさくさくさく

るさくさくさくさくさくさくさく

さくさく

量右大将

かたさくさくさくさくさくさくさく

如し節にいと多段申つる事ありし事にては
品段乃心よりして也し事ありし物也
くわかしの中おのそよえ取して阿羅乃心
しときより物さ四年の結太を中お不
まに之信して宰相なる中おまのまを
一竹河れをい中御そよの本れをい三
月の夕御しよりい持た物そよよりそよまを
無事はありありし事いし事いし事いし事
いし事いし事いし事いし事いし事いし事
いし事いし事いし事いし事いし事いし事

明石中宮

無事一のとりきりありし事いし事いし事

今をいし事いし事いし事いし事いし事
十六日むしし事いし事いし事いし事
いし事いし事いし事いし事いし事

いよ源流しむくきくまはしりてむらこ
のうらやいふしりてまはしりてむらこ
らんに赤家くほりりて源景今いふまはしりて
ふのまのまに中ふとてえむらこ

管兵部卿宮

しりては源流しむくきくまはしりてむらこ
の行幸の時も源流しむくきくまはしりてむらこ
竹河にふむきりてむらこ
一人ちり

侍従

梅冬乃まに源流しむくきくまはしりてむらこ
百午ふむきりてむらこ
一人ちり

兼守三位

いふむらこむらこむらこむらこ

もふらの賀々二月いむ後治ありての
をい春ふ月をさばく二月より元暦^{四年}
たふしをいゆきとえんくくはよけりせ
けふちふのきこいしうわとまふにけりりて
おまけ^{と後}の^{五年}ひた十の世に
いりわ

一宮 女ひきくらの女

竹のそよのそよしゆら

女一宮 女ひきくらの女御

一宮のそよのそよ

女二宮

竹のそよいむとれはまきと一宮のそよのそよ

宇治宮

もは朱蔭のそよのそよ一宮のそよ

中もあつらひたふさふさといふはよきしるしとて
ふたははるのふせとなりてふたははるのふせなり
くし心よりくし心なり京の所い他はくし心なり
いふれはくし心なり京の所い他はくし心なり
ふたははるのふせとなりてふたははるのふせなり
ふたははるのふせとなりてふたははるのふせなり

総角太君

ちくもやうきあてのらかひり大ねねいふら
ふたははるのふせとなりてふたははるのふせなり
ふたははるのふせとなりてふたははるのふせなり

通者中君

ふたははるのふせとなりてふたははるのふせなり
ふたははるのふせとなりてふたははるのふせなり
ふたははるのふせとなりてふたははるのふせなり

おぼろむねのむらさきくさありのけつふもね長
とあるを源氏のおくなら

竹徒 丹波のり方

宮老 昔

南の母のせむの馬頭はさうしきり浅中ね
しららぬしきりむくくわあ
あしり一羽て文のし方よ家老かてし
たをあらさかいらえわのちうけやありておと
こせし人あり

一品宮

一品 拙はよしちうかのをにみり

新斎院

あふひのあに重家のいしきよと并あてこ
さのをにあはらぬ脈よむかき勢給子

寬政八年丙辰正月五日

持田循勒成好古堂

